

バイロンの中の異邦人『マンフレッド』一考察

— 和解と乖離 —

黒 田 修

序

本論でとり上げる『マンフレッド』(Manfred: A Dramatic Poem)は、「精神の劇場」⁽¹⁾と呼ばれる一連の作品のうちの最初のものである。他の「精神の劇場」に見られるテーマの萌芽が既にこの作品に現れている。殊に同系列の『カイン』(Cain: A Mystery)とは、詩人(George, Gordon, Lord Byron)自身が述べているように極めて類似している。⁽²⁾ただ、問題意識は『カイン』ほど鮮明ではないが、その原型としての輪郭はほぼ形づくられている。

神(創造主)に反抗する<異邦人の魂>——これが「精神の劇場」に多少とも共通する原型であると共に、作品に現れる詩人の最も詩人らしい部分である。

『マンフレッド』に於ては、『カイン』に見られるほど強烈には神に対する反抗の姿勢は意識されてはいないが、代わりに<神との和解>を勧められてもそれを蹴るという形でやはり反抗が示される。『マンフレッド』の精神は結局永遠に和解することなく、『カイン』に至って神と戦いその位置に立とうとするルーシファ(Lucifer: サタン)に同調し、そのため神から刻印を受けて罰として地上を永遠に放浪する主人公カインに受け継がれる；どこに行けども自分の安住の地のない宇宙の異邦人という詩人のカインのテーマは、『カイン』に於て見事に結実したが、それ以前も以後も作品のここかしこに見られることから、詩人の精神の中核部分を表出しているものであると言えよう。

もともとこの精神は詩人の中にある異邦人としての素地、すなわち、地上(あるいは宇宙、あるいは神の創造)と相容れぬ意識から生じており、それは、作品に現れる詩人が自分の運命に疑いを抱くところからくる。そして自分の運命に疑いを抱くということは、万物を創造した主のその創造に疑いを抱くということと同義であり、そこから神に対する反抗に発展していくことになる。

『マンフレッド』で和解という方向と離反し、『カイン』で反抗の姿勢を徹底させ、神より天から追い落されたサタンのイメージを借りる時、異邦人としての詩人は潑刺としてその真価を発揮する。とはいえ、最終的に確立されたこの姿勢に至るまでに、当然詩人の魂も逡巡^{しゅんじゆん}を繰返して来ている筈である。少なくとも作品に見られる限り、『マンフレッ

ド』の段階で＜和解＞ということが意識されている訳だから、詩人自身創作の段階で内的に和解の道というものを真剣に取り上げて模索したであろうと思われる。しかし、作品に現れる詩人は、そうしたくともなかなか容易には和解の道へ進めない。なぜなら、その意識に於て、簡単に神の前に折れて伏すことができずに、自ら和解の道を鎖^{とぎ}してしまうからである。

では何故そうなるのか。詩人^{にんげん}バイロンにとっての問題とは何であるのか。それは、＜意識がある＞、ということそれ自体である。『カイン』では、「原子が死ぬように死⁽³⁾にたい」と言い、『マンフレッド』では音楽の調べに心寄せて、「楽しい音調と共に生れ、共に死ぬことができる⁽⁴⁾」というような表現を用いる。その主人公マンフレッドもカインも共に、生きていることの＜不協和＞を痛切に感じ、死ぬことによって心の安息⁽⁵⁾あるいは忘却⁽⁶⁾を願うのである。『カイン』では、ただひたすら生そのものの重圧を取り上げ、『マンフレッド』では、罪の意識および和解を問題にした。

このように、生の重圧とか罪の意識とかを問題にするということは、やはり、生きていること、即ち、意識していること自体を問題にしているのと同じである。それは＜意識の疼^{うず}き＞とでもいうものであり、それを表白する詩人の創作態度は、人間の置かれている立場を、既成概念や発想に一切とらわれずに、自身絶対に否定できない現実すなわち自分自身の肌身で実感したところから判断する人々の共感を呼ぶ筈である。それで、誰彼が言うからというのではなく、一個の人間として立つ私自身の生身の判断を全面的尺度にして（私も＜意識がある＞という共通点を詩人同様持っている訳だから尺度としての資格は十分にある）、そういう方向で、作品に現れる詩人を一人の人間として捉えてみたい。

そこで、詩人の精神が辿^{たど}った軌跡を^{さかのぼ}遡り、『マンフレッド』を『カイン』に至る前段階として踏まえ、バイロンの中の異邦人の魂が何故和解という方向を採らなかったか、あるいは採り得なかったかに焦点を合わせて考えてみる。その際、詩人と作品とを切り離して観るのではなくて、作品に現われているところは少なくとも一度は詩人に意識されたことであるから、この作品そのものも詩人の理解・把握しているところと見る（そこで、作品を通じて現れる詩人を以後単に詩人と呼ぶ）ことによって、バイロンという運命を生きた一個の人間の意識の現実^{ありかた}を知る手掛かりとしたい。というのも、自分の運命を疑う人間は何も詩人一人に限ったことではないからであり、自分の運命に疑いを抱く時、自然、人は人間の普遍的な問題に行き当たり、生死の問題から神と人間との問題などに及び、拳句は、＜魂の救い＞を求めるまでに至る。詩人は、そういう人種を代表して、魂の救いを求めて足掻く、そんな意識のあり方に表現を与えたのである。そこで、本論でも、最終的には魂の救いというものを求める方向で足掻いてみようと思う。

I

マンフレッドは、結果的に、愛する人アスタルテ(Astarte)を殺してしまった。その原因・経緯⁽⁷⁾については明瞭には記されていない。が、僅かに言及されているところから、二人は近親相姦の間柄で、愛してはならない者同士が愛し合ったために、心が疲弊したアスタルテの方が自ら命を断ってしまったのであろうと推察される。その結果、取り返しのつかないことをしたという悔恨がマンフレッドの意識を支配している。それは、悔んでも悔み切れない喪失感から来る。何しろ、この地上で唯一の理解者で共鳴者で分身で、かつ、理想⁽⁸⁾で生きがいである対象を失ったのである、から。

今や、マンフレッドの望みは、自分と共通すると同時に、自分にはない優しい種々な能力を備え、憐み、ほほえみ、涙、優しさ(深い愛情)、謙譲の心(美德)を持つアスタルテを甦らせるか、彼女と一緒に地下に横たわるかのどちらかである。現実には、ここまで一人の人間の気持を捕え魅了する対象をこの地上に見い出せた者は、むしろ極めて幸せである。何故なら、普通我々は自分自身が帰るべき安住の地を求めて彷徨い続け、地上にそのような懐⁽⁹⁾(楽園)を見い出せることは稀であるからだ。とはいっても、マンフレッドも一度は確かに帰り着くことの出来た安住の地アスタルテが、非情にも目の前から消滅してしまうのであるから、やはり、地上では人間の帰還すべき<永遠の懐>は永久に見つからないままであることが仄めかされる。

痛烈な悔恨とともに、マンフレッドは犯した罪を激しく自覚する。その意識には、世に禁じられていることを犯したという自責ばかりか、二人とも天(heaven)から締め出されてしまった⁽¹⁰⁾、という悔恨が生じる。つまり、その罪の自覚に於て、もう一つ<地獄(hell)行き>の意識が交じる。それは、このような近親相姦の罪は、神には絶対に赦されないものとして自覚しているからであるが、この認識の仕方には、詩人の受けとめ方によるキリスト教社会の信仰⁽¹¹⁾の反映が見られる。

一般に罪というものは、現実には罰によって自覚されるものである。例えば、近親相姦の罪を犯したとすると、罪そのものよりその後結果として生じる諸々の障害あるいは現実の不幸故に苦しむところから、反射的に罪を犯した罰であるという観念が出てくる。つまり、苦しむのは神の禁を犯したからだと考えるところから罪の意識が生じるもののである。しかし、これは罪とか罰とかという観念が既に定着している意識の層での反応である。遡って、原初的な意識のレベルに於て考えられることは、先ず、現実の結果としての苦しみが脅威的(破壊的)であるということがある。そこに、度重なる不幸を現実に見てきた長老たち知恵者がいて、経験的にそのような苦しみを引き起す因果関係を発見し、そのような不幸を未然に防ぐために原因となるところのものを禁ずる。その時、神を担⁽¹²⁾

出してくるのである。世に禁止の号令を発するその時に、人間を圧倒する何物か（例えば神）の罰ということにすれば効果的であるということ、これも経験的に知っていてそれを実行したものと考えられる。しかし、世に神の罰という観念が効果的であるとする、それは世の中の方に、もともとそのような観念を受け容れる土壌があったということになる。なぜなら、誰でもその意識の上では、脅威や破壊（生老病死など全ての苦）と神とは当然結びつくものだからである。

現代人は古代人と比べれば、確かに精神の関わる風物は豊富に、かつ複雑にはなったが、その関わりに於て根底的なところでは何ら変りはない。相変らず脅威^{はかい}に対しては怯え恐れるという反応をする。ただ、脅威とその原因との因果関係についてある程度解明できたものについては、恐れが少なくなっているが、脅威そのものはいろいろな形で新たに次々と生じてくるし、なくなってしまうということがない。ということで、現代人といえども関わる精神風土は古代人と少しも変らず原始的である（故に、脅威というものがある限り、人間にとって神は常に存在するのである）。

元来、神は、人間が避けたいと思っている脅威と密接につながっていた。人間を脅かすものを人は恐れ敬った。文明のお蔭で敬うということこそ薄れたが、たとえ理由が分ることであっても恐れる気持は変わらない。この＜恐ろしい＞という気持は、どうしようもなく意識に生じてくるものである。そして、この気持を少しでも緩和して欲しいという気持が更に同じ意識に生じる（これらは全て＜意識＞の上での出来事である）。緩和して欲しいとは、脅威に対して赦して欲しいと願っているのと同じことである。赦しを乞うこの時既に、意識の上で脅威そのものを人格化して捉えており、罰＜神＜罪の構図の原形が成立している。それも殆ど無意識のうちに、三つの概念が一度に生じているのである。脅威を人格化するところから、こんな嫌な目に会うのは何かの罰だというような受けとめ方が出てくる。それは、脅威自体、人格的な脅し^{おど}と同じ意味合いで意識に切り込んでくるからである。脅しは、＜禁ずること＞と結びついている。何らかの禁を破ったから脅（罰）されているのだということになり、禁を破ること即ち罪の発生である。そして、脅威を及ぼしてくる自分以外の何物かは、圧倒的に自分より上位^{かみ}（神）にある。これが自分（人間）にとっての神であり、赦しを乞うより外ないところに＜自分^{にんげん}＞は位置している。

自然のこのような位置関係にキリスト教者の解釈が付け加わると、旧約創世記にあるように、神は唯一神すなわち創造主で、人間はその被造物であるとなり、人間は始祖アダム・イヴの犯した罪（原罪）の為に罰としてエデンの園（楽園）を追放されたという認識となる。更に、新約に至って、この原罪がキリストの死によって贖われたという信仰となるが、詩人の場合には、この新約の信仰よりも旧約の認識の方が色濃く反映する。それは、詩人自身が幼少期から殊に旧約に慣れ親しんできたということ以上に、詩人の眼がむしろ＜現実＞というものに敏感で、現実が抜き差しならぬものとして迫ってくるため、現実の

実感を否定してまで〈信仰〉に飛び込むという飛躍がなかなか為しにくいからであろう。詩人が、旧約殊に創世紀に記されている非情な状況の方が自身に関わる現実にはずっと近いと感じていることが、この作品の主人公マンフレッドの意識の上にも現れてくる：既に楽園を追放されて堕ちたところに立っているのに罰として更に重い^{くびき}軛を受けるべく罪を重ねないとおれない、という呪われた運命を背負って歩み続ける——永遠に天上の楽園には戻れない、という意識である。

キリスト教圏の人々が帰属したいと願う天、そこは彼等にとっては楽園である。そのような楽園を喪失するという実感（それは、彼等にとっては〈魂の救い〉を永遠に喪失することを意味するものであろうから）には、キリスト教者以外の者には測り知れぬ程の深い悔恨の情と絶望感が漂うのであろう。マンフレッドには、そのような意味で、現実の唯一の^{いきがい}楽園を失ったことと、愛する人も諸共に天上の楽園を失ってしまったという二重の喪失感が暗雲として重くのしかかるのである。しかも、マンフレッドはいわゆる信仰者ではない。彼の属するキリスト教社会の通常の信仰が彼には生きない。他の信仰者たちが救われるようなあり方では、彼の魂は救われない。そこで、彼は、罪の意識を持つ自分自身を忘却したいと願う。その為に、あらゆる方法（科学、魔法修業、等）を試みる。しかし、それもすべて⁽¹¹⁾空しいことが分る。

マンフレッドは、もともと若い頃から、人間の衣は着ているが、息をしている人々とは共感しない、地上の^よ異邦人^{もの⁽¹²⁾}であった。半濁半聖の身の上故、自身がまとっている土⁽¹³⁾(clay)を⁽¹⁴⁾厭い、⁽¹⁵⁾荒れ野に一人孤高を保つことを好んだ。そのため、外界の死を見つめながら、あらゆる難行苦行をすることによって⁽¹⁶⁾霊的な力を身につけ、〈永遠〉というものに目が届くようになった。その結果、ライオンのように、群を離れて一人孤立⁽¹⁷⁾する。それは、もともと彼が、人生が嫌い⁽¹⁸⁾だったということによる。しかし、そのような自分を彼が自身で作ったのではなかった。気が付いたらそのように出来上がっていたのである。そして、そのような自分を外界（として映るところ）の^{はかい}脅威（これは内界の意識の上で問題となる）に馴化⁽²⁰⁾させることが出来なかった。それは、脅威の前に決して平伏しない魂であるからだ。

この場合、魂とは楽園を離れた（脅威を知覚しなければならない）ところに初めから立たされていることを意識する存在の、いわば受皿である。もちろん、それは、意識の器ということで、意識はもちろんのこと無意識とか肉体とかの意味も含む。無意識とか肉体が受ける刺激も意識^{のぼ}に上って初めて知覚される。逆に知覚されなければ、無葛藤、無自覚であるから、何も生起しない（何も問題とならない）無となる。ところが、人間というのは意識する〈有〉の存在で、実際、気が付いたらこの地上に意識することを強いられており、しかも意識がないところ（無）では人間は成立しえない（脅威のある世界から脱出しなければならぬのにどうしてもそこに留まらねばならない）という二律背反がある。この〈意識がある〉ということ、そして、自他に分れ肉体を持つということ——これこそ正に

人間にとって原罪（知恵の樹から採って食べた）と言えるところのものであり、これが地上の〈異邦人〉を作り出す元凶となっている。

〈意識がある〉ということのために、外界（自分以外のもの：自分の意識の対象となるものであれば、内界のあらゆる脅威あらゆる事象をも含む；以後その意味で使う）と自分との〈乖離〉が生じることになり、地上にぼつんと独り自分というものが孤立することになる。そして外界の脅威に晒されながら、為す術がないということになるのである。この時、自分自身を知覚する意識は、自分という存在が〈受身〉であることを痛感する。そこから反対に、受手に作用を及ぼす〈能動主〉を想定するということになり、延いては、生殺与奪の権限を握り万物に作用する主を意識する。これを、キリスト教の方では、創造主と見立てるが、この字義は創り出すということであるから、作る方に重きが置かれている。が、作るということは、同時に、反対概念の壊すという意味を暗示している。絶対者を名付けるのに、壊す方を落して作る方を取り上げているところに、根源的原初の発想がうかがえる。破壊的な悪いイメージを退けて、希望を抱かせる善なるイメージと結び付けたのは、全く、意識することを強いられる側からの発想である。現実には、同じ地上に同時に誕生と死滅を目にしている訳であるから、外界の圧倒的な力としては、両者のイメージを同等に付与されるべき筈であるが、片方に重点を置いて取り上げたのは、意識というものが〈受身〉であるという現実の悲しさである。

意識にとっては、脅威およびそのイメージは退けたい、そして意識の外に永遠に放逐したいと願う外界の力であるところから、悪という認識が生まれ、反対に、生み育ててくれるもの及びそのイメージは善という認識になる。これは、意識の外界の力に対する正直な反応である。ここから善悪二元の対立概念が生まれ、更にそこから、神・悪魔・罪・罰・救い、等、諸々の概念が引き出され、それらが色々に解釈されることになる。しかし、神や悪の問題を難しく論じたり、意味付けするのは（それはそれなりに実際的に重要な意味を含んでいるであろうし、神秘的な体験によって得られた認識もあることであろう、ということとは決して否定しないが）後の時代の話である。今は、〈現実〉というものを全ての尺度にする詩人の姿勢に基き、人間の原初に立ち返って話をすすめる。

魂の救いを求めて足掻いたマンフレッドは、結局何をやっても無駄であることを思い知り、絶望する。そんな彼に、和解（神との和解・自分自身との和解）ということが、彼の居城の近くの僧院長（Abbot of St. Maurice）によって勧められる。その僧院長の説くところはこうである：内なる責め苦が如何なるものでも、それはそのうち喜ばしい希望に取って代わられるものである。それで、穏やかな確信をもって、かの至福の地を仰ぎ見ることになり、そこは求める者には与えられるところであるから、この地上に於ける罪が如何なるものでも（罪の償いはその必要を感じるころから始まるのであるから）必ず償われる。それ故、罪を感じているならば、真の教会と和解し、その教会を通じて天と和解す

る、つまり、罪を懺悔し罪の相手を哀れむことである。それが、自分を自分自身の魂と和解（調和一致）させ、自分自身の魂を天と和解させることになるのである。

これに対してマンフレッドは次のように答える：

Old man! there is no power in holy men,
Nor charm in prayer—nor purifying form
Of penitence—nor outward look—nor fast—
Nor agony—nor, greater than all these,
The innate tortures of that deep despair,
Which is remorse without the fear of hell,
But all in all sufficient to itself
Would make a hell of heaven—can exorcise
From out the unbounded spirit the quick sense
Of its own sins, wrongs, sufferance, and revenge
Upon itself ; there is no future pang
Can deal that justice on the self-condemn'd
He deals on his own soul.

(25)

老師よ、聖者として力はない、
祈りの魔力も、懺悔という浄めの作法も、
見た目の様子も、断食も、
死の苦しみも、これら全てより更に偉大な、
しかも地獄を恐れる気持などとは違う悔恨で、
全くそれ自身にふさわしく天国を地獄にしてしまうような
あの深い絶望にもとよりある責め苦も、
自分自身の自由な精神から、その敏感な意識
すなわち、自らの罪業、不徳義、忍従、
自身の上に課せんとする復讐などを敏感に受ける意識を
祓い浄めることはできない；きたるどんな激痛とでも、
自らを咎める者の上には、自らの魂に正当に課す
あの応報^{むくい}を課せるものではない。

マンフレッドのこの敏感な意識(the quick sense)こそ、詩人の最も詩人らしい部分を形成するところのものである。この意識がある故に、僧院長が代表する人々のようなく信

仰>に飛び込むことが出来ず、故に又、<和解>の効用を直感的に信ずることが出来ない。それで、和解ということとは、ずれてしまうのである。

II

考えてみれば<和解>というのは、原始的な意味では人間のやむにやまれない謝罪行為である。脅威（罰）を受けることが既に償いであるが、それを乗り越えていくために平伏の証^{あかし}として和解ということが要る。神（脅威^{はかい}）との和解ということに於て、人間は先ず自分の罪を認めて謝る、すなわち懺悔をする。そして、この懺悔によって赦されるということになる。この時<和解>ということが<降参する>という意味を含んでいることに注目する必要がある（英語でも、和解には服従・降参の意味がある^⑧）。神の禁（一般に世に禁じられているようなこと）を破ったことを自覚できる場合のみならず、自身としては、どうしてこのような辛い目（脅し＝罰）に会わねばならないのか見当がつかない場合でも、人間は謝る外に術はない。ただただ罪を赦してもらいたいためにである。恐ろしさの余り、地にひれ伏して詫げる。何の罪か分らないのに謝る——このことから<原罪>という観念の発生が思い起こされてくる。

圧倒的な脅威の前に降参する。自身としては自覚はないが、これ程の罰を受けるのは何か余程のことをしたのだらう。こう思うより外ないところに置かれるのである。そして、そのような思いは、人間の意識の上で、普遍的に生じる。そこで、人類が一様にこのような脅威を受けるところに置かれるのは、人類が何かは分らないが神の禁を犯したためだらうというような結論に至ることになる。そして、その必然的欲求として、原罪から人類をキリストが贖ったというような考え方が出てくる。

しかし、これはもう<信仰>の域に入っている。なぜなら、現実には人々の苦しみは去らないのに、気持の上で得心し安心できるための方便として編み出された考え方であるからだ。赦されたと思うことで気持の痛みを緩和する。現実の脅威（苦しみ）を乗り越えていくには、乗り越えられなくなりそうな気持を奮い立たせて、圧倒してくるものにも敗けないで立ち向っていけるようにする必要がある。そこで、これから進む前途に希望に至る一つの道を敷いて、それを唯一の頼みと<信じる>ことによって勢いを得るのである。その時、分っていないことだからこそ信じられるということがある。何か訳が分らない、不可解で得体が知れないからこそ恐れ入って、その前には有無を言わず従う。又、同じ降参のパタンである。脅威を乗り越えるのに脅威の威（神の救いの信仰）を借りて自ら脅威と化し、現実の脅威を粉碎するのである。

この時図式的には、降りかかる脅威（生老病死の全て）に対して赦しを乞う、そして懺悔して詫げることによって救われる。あるいは罪はキリストによって既に贖われていると

いう〈信仰〉が生きて、脅威を物ともしない、というより、脅威を赦し抱ける程の気持と化し、その時既に脅威を遣り過したことになる。つまり、脅威を赦した（抱いた）時、その時赦された（救われた）ということになるのである。こうして論理的には一応和解が成立する。

しかし、果してそのようなことが真に現実出来るものであろうか。当然ここに疑問が生じる。この時、通常の信仰者ならば、大いなる信仰を信じることによって、現実には苦を受けあえぎながらも、その脅威（神）には目をつむり、そうすることによって脅威そのものを忘れて生きていく（乗り越える）のに、マンフレッドは人間の〈受身〉の運命にこだわり、それを赦せない。彼には周囲の人々のような信仰がどうしても持てない。それは、人々が信じているところを直感的に信じられないからである。要するに、彼自身に信仰がないために、やはり和解ということともずれてしまい意味を持たない。

この不協和の状態が、〈異邦人〉の状態であり、神およびその創造から乖離している状態であり、マンフレッドは宇宙に漂う彗星(A pathless comet)の如く、永遠に放浪し続ける魂となり、この状態は、実は、自ら気付いていてもいなくても、和解ということ信じられない人間すべての魂を代表している。帰還すべきところ（人間の側から永遠の楽園として思い描かれるところ）を求めて永劫に彷徨い続ける——それは正に自分の運命を疑う人間の姿である。現実の外界との軋轢を離れたところに帰還すべき楽園を求めてはいるけれど、実際には自分を取巻く現実の外界（地上の破壊性）とは融和していないのである。では何故ずれて（乖離して）しまうのか。どうしてマンフレッドは真の意味で和解できないのであろうか。

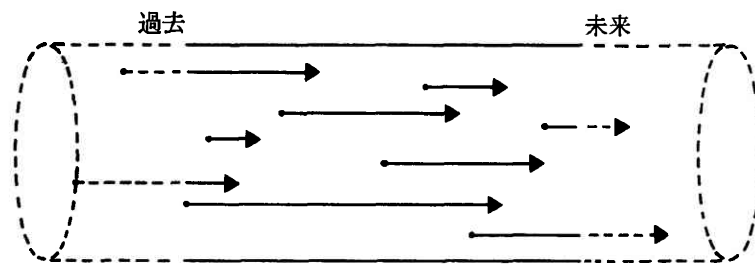
現実には脅威を受けながらそれを赦す（実は目をつむる）という人々のあり方に、先ず、欺瞞(a living lie)を感じる。そして、目をつむることによって赦された、即ち、ただ当座のみ現実の脅威を遣り過し（乗り越え）ただけというところに意味を見い出すことが出来ない（果して本当にそんなことでいいのかという疑いのためである）。ということで、詩人の意識に於ては、和解ということによって〈魂の救い〉が成立するとは思えないのである。ではなぜ直感的にそう思えないのか？ その直感の部分はどういうことか推察してみよう。

先ず、脅威を受けながらそれを赦す時、意識に於てはそれが赦せるための何かが必要（それを、赦すも何も、ただただ遣り過ぎざるを得ないから遣り過しているだけ、というような余裕のない意識の状態もあるだろう。その場合、意識の異邦人化は起っていない。意識が異邦人化した時初めて全てが問題となる。では問題とならなければ魂は救われているか、ということになるが、その時、苦を苦として足掻いている訳だから、そのこと自体既に救いではない）。何か理由を見出して諒解しなければとても赦せるものではないからだ。何故こんなことになるんだろう。何故こんな目に会わねばならないんだろう。このような疑問が当然起る筈である。そこから、色々な理由が考え出されてくる。相手が脅威で

あるから、何とか赦せる為には大いなる理由が要る。そこで、先に見たような、進む前途に希望に至る一つの道を敷いて、それを唯一の頼みと信じる〈信仰〉が生れる。

しかし、この信仰は〈先につなぐ希望〉がその本質である。それは、数々の脅威を次々と遣り過ぎていって、しかも生死を何度も経たずと先に〈魂の救い〉が開けるといふ希望である。そして、神と約束を交わしたという強い信念である。が、実は、これら神も神との約束も魂の救いもその希望も全ては、脅威を受けた同じ一つの意識に生じる観念である。そのうち脅威のみが意識を襲うものとして自分の外からやって来るもので、あとの観念は全て外からやって来たものに対する反応として自分の中に生じるものであるが、外からやって来たものも結局は自分の意識の中で問題となるのであるから、あらゆるものは自分の意識の中で生起すると言える。

そここのころで人は、自分というの是一個の自分だけのことである、だから救いということも自分一人の救いである、と錯覚することになる。が、実は、〈自分〉というものは、〈普遍的な意識〉そのもので、それはこの地上と関わるべく絶えず生成消滅を繰り返している。その生成消滅が具体的には個々の自分の意識（あるいは自覚）の誕生と死滅となっている。この関係をもう少し明らかにするために（厳密さを無視して敢えて）図示すると次のようになる。



図の矢印で示した部分が、それぞれ一個の人間の〈自分の意識〉の誕生から死滅であり、それらの矢印を包んでいる筒が普遍的な〈自分の意識〉である。個々の矢印に、もう少し厳密さを要求するとすると、意識のある時とない時という意味で、起きている間と眠っている間（それも夢を見ている時とそうでない時）との区別を表さないといけないうし、又、自分ひとりの自覚が一回だけの生に限らない（過去世から今世にまたがって自分の自覚があるという）ことがあるかもしれないから、一つの生から他の生にかけての一時的な意識の途切れの部分も示すべきであるが、一応、自分自身の自覚が継続している間を矢印で表したのである。ここで一つ検討すべきは、個々の自分の意識が、^{もともと}源が同じ普遍的な自分の意識であるのに、何故、互いに自他の区別をし合うのかという疑問である。それは、普遍的には同じ〈自分の意識〉でも、個になると、現実的には、肉体という個の条件因子とその誕生時の時間・空間の条件因子とで絶対唯一無二の条件（魂）が成立し、その条件による運命というものが出来上るからである。そのために、互いに自他の区別をする

ようになるのであるが、それは互いの魂の背負っている運命^{じょうめい}の違いを識別しているに過ぎないのである。それぞれ自分の背負っている運命が自分だと思込んでいる訳であるが、それは錯覚であって、実はそれ以前に普遍的な＜自分＞というものがある。つまり、錯覚で自他の区別をしてしまうが、本来、普遍的な＜自分＞しかなかった訳である。それは、これが自分であると自覚することになる《意識》そのものである。そして、この意識は未来永劫に自転し、自ら打ち消すことの出来ない《存在能²⁹》を持つ。しかも、この意識のあり方として、それが自覚することになる＜自分＞は、いつまで（どこまで）行っても常に《脅威に晒される受身》なのである。ここに、人間の致命的な諸悪の根源がある。はじめに意識があり、それが受身で、そして更にそれが自他の区別をすべく地上にて分割する。そして又、肉体に象徴されるものがある故に、元凶となる自他の区別をせずにはおれない。この悪循環を原罪と言わずして何と言おうか。

このような意識というものの現実^{ありかた}から考えると、先につなぐ希望＜魂の救い＞も、自分の中に生じた何故こんな目^{ありかた}にという疑問を落ち着かせるために自ら編み出した捏造^{イリュージョン}に過ぎないことが分る。という、それでも気持の上でも救いとなるならそれでいいではないか、というような反論があるかもしれないが、逆にそれならそれで信仰者は真に救われたことになるのであろうか、ということになる。そしたらそこで今度は、それじゃ何が真に救いなのか、又、本当に救いなど要るのか、ということをお問ねしなければならないことになる。

先ず、人間という意識存在には＜救い＞は必要不可欠である。それは、意識というものが受身で、絶えず＜助けて欲しい＞と願わざるを得ない立場に置かれるからである。では、何が真に救いなのかという、意識のその＜受動性＞を終結させること（だからと言って、決して救いとはならない死を意味するのではない）である。そうでなければ、意識が受身のままでは、絶えず脅威に晒される立場^{ところ}から一步も脱し得ないからである。

このような観点から、先程の＜信仰＞をもう一度顧みると、どこまでいっても永遠に神（脅威）を拜していることが分る。つまり、いつまでも受身の意識のままでいいとしているのと同じことで、それでは救いは永久にない。だから、和解ということも自分の意識の中で脅威に黙従することになっただけでは、どのような理屈をつけてみても、やはり真の救いではない。それは＜諦め＞でしかない。これでは、棚から牡丹餅式のあなた任せをやっているのと同じで、いつかその時がやって来てくれるのをただ《待っているだけ》である。何度も生死を経たずっと先に＜魂の救い＞が開けるなどと言うのは、救いの時まで脅威を実際に受けてしまう意識^{ありかた}の現実を無視するものでしかない。それでは、魂の救いを求める気でいながら、同時に、それを我々が唯一関わるこの地上に実現できないものとしているのと同じであるから、現実には地上の人々（すべて自分である）を裏切っていることになってしまう。この辺りに、詩人は直感的に欺瞞を感じる。それ故、詩人は、人々のこのような次元の＜信仰＞が持てないということになるのである。

III

現実的に考えてみて、脅威^{はかい}を目の前にすれば、あるいは内的にどん底まで落ち込めば、なるほど自分ではどうしようもないから、平伏し降参する。現実に現われたその境地は、仕方がないこととして何とか諦めようとする。和解ということに於て、これが赦すということである。しかも、その程度がせいぜいであって、どうして現実の脅威を包み抱ける程になろうか。それ程人間は一般に大きくはない（意識が受身のままであるから）。

もっとも、理屈ではなく、実際に悲惨な目に会ったり、窮地に陥ったり、大病をするなどして落ち込んでしまうと、そこから助けを求めて強烈に救いを信じたり、又、そのために難行苦行を実践したりするところから、何らかの神秘体験を積むことによって、真に救われるということはあるいはあるかもしれない。しかし、信じると言っても、ただ信じただけで物事が変わるということがない（例えば、肉体はないのだと信じたからといって、たちどころに肉体がなくなるということはない）ことから分るように、その信じるところに行きという（信じているところを実際に行える）ものが伴わなければ恐らくだめであろう。なぜなら、肉体とか無意識とかというものは、それを調御するには、意識的な働き（作用）だけではなかなか一筋縄ではいかないものであり、肉体に象徴されるものがあるために自分一人だけをどうしても守るようになって、延いてはそれが全ての〈自分〉を損なうことになってしまうというジレンマがあるからである。ともかく、何らかの神秘体験をして救われるという場合でも、その時、意識というものの受動性を終結させていなければ、やはり真に救われたことにはなっていない。

神秘体験というものは自らが実際に経験してみなければ分からないことではあるが、和解ということに於て唯一開ける道があるとしたら、はたらきかけるもの（脅威＝神）と、はたらきかけられるもの（自分＝人間）との相方から〈同時〉に調和一致する神秘が作動するというような時のことであろう。その時、あるいはひょっとしたら、僧院長が言うように、自分を自分自身の魂と、そして自分自身の魂を天と和解させることが出来るのかもしれない。この時、自分自身は天（破壊性）と一つに融和し、天そのものとなっている。そして、それが自分という意識にとって真に救いとなっているためには、最早、受身の境地を脱却して脅威など受けなくなっていることは当然であるが、少なくとも〈自分という意識〉のあるもの全てを同時に救い上げていなければならない。

何故なら、もし、一個^{ひとり}の自分のみが救われたとしたら、その自分は、他の全ての自分^{たにん}とは永遠に異なることを自覚していなければならないからである。そうなれば、又もや乖離の始まりである。果してそのようなことが救い、あるいは、悟りなどであろうか。もちろん、そのような自分は、意識に於て最早受身ではないのであるから、自分自身の意識を永遠に保持しておれる自己保証は自由^{おもいどおり}に出来るであろうが、そのような意識に何があるで

あろうか（と、このように言うと、神秘的な世界のことを人間の悲しい^{さが}性で推し量ろうとしても無駄だというような誹りを招きかねないが、問題が自分という意識にとっての救いであるから、自分にとって救いになるかどうかを問う資格はある筈である）。そのような意識に開けることと言えば、恐らく、いつまでも自他の区別をつけたがる〈独りよがりの世界〉でしかないであろう。そんな世界で何をするのか。何をするのも自由ということは、窮極に於ては、何もしないことと同じである。全てのことをしている、とは、もう何もすることがない、つまり、同時に全てを始めて全てを終っている、というのと同じであるからだ。そうなっても未だ自他の区別をしているとしたら、その意識は無限の孤独地獄にいることになる。自分以外の他も全て自分、となるのではなしに、自分以外は全て他と見るのであるから、他は全て自分の孤独を紛らせるための道具として存在するに過ぎないこととなる。このような意識が永遠に開けることになっても仕方がない。

そこで、真の救いとなるためには、天と一つに融和して天そのものとなる（和解する）ということが、受身の境地を脱却するとともに少なくとも自分という意識のあるもの全てを同時に赦して救い上げていなければならないことになる。ここで、天地と和解するということは、天地の全てを飲み込み〈全てを赦す〉行為と等しいという命題が再び浮かび上がってくる。そこで、〈救う〉ということが〈赦す〉ということと同じ線上に展開することにもう一度目を向けてみる必要がある。

天地の全てを赦すということは、最早自他の区別なく、清に濁を見、同時に濁に清を見、全てを自分のこととして慈しみ、自分自身が天地そのものと化す（そのためには先ず、自分の意識の中で、永遠という時間性と死という破壊性を克服消化できてしまわねば、おいそれと出来るものではない）訳だが、そのようなことが果して現実に可能であろうか。詩人は、それが出来なかった。極度に濁の方を嫌ったからである。天地にある悪（脅威・破壊・汚濁の部分）を出来ることなら天地（すなわち意識）の外に永遠に追放してしまいたいと願った。が、それは出来なかった。何故なら天地自体が自分そのものであり、自分自体が意識そのもので、天地（自分：意識）には「外がない」からである。

仮りに、天地（普遍的な自分の意識）を〈大きな自分〉（これは時に、大我とか自己とか呼ばれる）とし、その中の人ひとりの自分を〈小さな自分〉（小我）としてみると、大きな自分が自身の内にあらゆる脅威を抱えているのに、小さな自分が幾ら大きな自分の脅威を赦し、大きな自分の中に融和してみたところで、大きな自分自身が脅威（生老病死など全ての苦）そのものとして現れるものであるから、大きな自分、すなわち、〈意識が自ずから生じる存在能〉自身が、その存在能を放逐し得ない限り、それこそ〈苦の意識〉はとどめようもなく永劫に続いてゆく。要するに、意識の存在能である〈大きな自分〉は、外界というもののない閉じた^{せかい}宇宙だから、外に放逐する術は元よりないのである。このよ

うな状況を、マンフレッドが悪魔に向って言うところで、詩人は次のように表現する：

The mind which is immortal makes itself (31)
 Requital for its good or evil thoughts—
 Is its own origin of ill and end—
 And its own place and time—its innate sense,
 When stripp'd of this mortality, derives
 No colour from the fleeting things without ;
 But is absorb'd in sufferance or in joy,
 Born from the Knowledge of its own desert.
Thou didst not tempt me, and thou couldst not tempt me ;
 I have not been thy dupe, nor am thy prey—
 But was my own destroyer, and will be
 My own hereafter.

死滅することなき心^{いしき}は自分自身が、
 自ら思い描く善悪の報償となり、
 それ自らの悪の源^{みなもと}であり果てであり、
 それ自身の場であり時であり、その生来^{もと}からの意識は、
 この死の衣を剥ぎ落せば、
 外界の無常^{つかのま}の事象から取り込む色は一切ない；
 が、自身が砂漠であることを知ったことから生れる
 忍従あるいは歓喜が全てとなるのだ。
 悪魔よ、お前^{そそのか}がいて私を唆したのではない、そんなことできよう筈もなかった。
 私はお前^{だま}に騙される者としてあったのでもないし、今もお前の犠牲としてあるの
 もない。
 ただ私自身^{じぶん}が私自身^{じぶん}の破壊者であったのだ、そして、今後も
 私が私自身^{きたるよ}の来世であるのだから。

詩人は、このように意識^{ありかた}の現実を見ている。そこには、ただただ砂漠が広がっているのみである。しかも自らが自らに対し脅威となつて突っ立っている。こんな砂漠の意識には、世間に普通見られる信仰では通用する筈がない。それは確かに、自分自身のそのような運命を疑う懐疑精神ではあるが、それ故にこそ強烈に救いを求めようとする。これは明らかに一つの求道である。このような砂漠にとって、まず降ることのない慈雨（魂の救

い)はどうしたら得られるのか。

我々個々の人間の意識というものは、それぞれその中に展開する全天地を^{はら}孕み、その全天地つまり宇宙(あるいは意識の存在能あるいは大きな自分の意識)が、同時に逆に、個々の人間の意識を脅かすものとして取り囲んでいる(我々小我が包んでいながら、包んでいる筈の大我に^も包まれている——これが小我と大我との関係であり、意識というものの構造である)。しかも、それは誰にとっても普遍的には紛れもない、どうにも否定しようのない^{じじつ}現実なのである。それ故、この構造から、どこまで行っても我々は、どうしても今あるがままでよしとする外ない、という結論に行きついてしまう。どうしても外に道がないのである。老いること、病むこと、痛むこと、死ぬことなどの苦を一体どうしたらいいのか。これらはただ受容する(降参して赦す)しかないのか。だとすると、苦い薬を飲み易く工夫するのと同じで、^{じつじゆ}現実に受容し易くしていくぐらいのことになる。ここまで来ると、苦痛を和らげるために、人々によってこれまで必死であらゆる方法が編み出されてきたことが無理もないこととして理解されてくる。どこまで行っても人間の意識は受身であって、その立場故に常に神(脅威)を拝し続けるというところから外には一步も脱し得ない。故に、どうしても退けたいということで内にある脅威を外に放逐しようとする限り、人間は意識存在であるから、その受動性および《閉塞性》のために、真に救われるということは絶対にあり得ないのである。それゆえ、和解ということも、先につなぐ希望が本質の〈世間の信仰〉によったのでは、詩人が救われるところとはならないのである。このところも又、詩人が直感的に感じた部分であろう。

結

赦し赦され〈和解〉するということは、やはり地上に於て現実的にはどこまでいっても〈やむなく降参〉するということであった。マンフレッドに現れる詩人は、この降参ということが出来なかった。が、だからこそ切に降参ではないほんものの和解すなわち〈魂の救い〉を求めようとしている、という点で、真に和解するのに常に最も近いところに立っていると言えよう。なぜなら乖離とは、和解の反対概念である故、和解とはもともと隣合せの筈だったからである。

もし、何らかの方法で、やむなく降参する(諦める)のではなくて、生に於けるあらゆる^{はかい}脅威を、意識ありながらその受動性を解決した上で、^{しん}真実、ポーズなどではなく心から苦もなく受容することが出来る人がいるとしたら、その人は既に人間を^{じぶん}超えている。自分という意識、つまり人間のこの宇宙次元を超えてしまっているのである。こう言うと、自分という宇宙には外がないから脅威を放逐できないと述べたことと抵触するように受取られるかもしれないが、決して矛盾しない。超えるということは、この宇宙を残しながらそ

の外に出たというのとは訳が違ふ。その時、同じこの宇宙がそっくり変貌してしまっているということなのである。同じ宇宙でありながら、どうしてそのようなことが成り立つかという、この宇宙が、それを抱える〈自分の意識〉の変貌によっていかなる宇宙にも変貌する、換言すると、自分の意識そのものが《多次元構造》をしている、と考えられるからである。

同じ一つの空間に多次元宇宙が無限に同居している。それで、どの次元に自分の意識があるかによって、その眼前に開ける世界が異なることになる。それは、自身がこの同じ一つの宇宙空間から、どの次元の宇宙を開くか、ということであるが、現実には、この地上で自分自身の中からどういふ自分を引き出すかということにかかっている（と一口には言えても、これには想像を絶する想像力が要る）。だから、真に和解することが出来るかどうか、つまり、全てを赦すことが出来るかどうかは、働きかけるもの（脅威＝神）と働きかけられるもの（意識＝人間）との相互の同時性に頼むことになるろうが、少なくとも働きかけられる側が、逆に働き返そうと努めなければそれは起らないことも又確かであろう。

今の次元では、自分という意識は常に受身だが、あらゆる脅威^{はかい}を本当に苦もなく受容できることがあるとしたら、その時、最早、脅威が脅威でなくなる（時に空^{くう}と呼ばれる）ところに立つ訳であるから、それは受身の境地を既に脱したことになる。かと言って、地上とは異なる何処か別のところに立つのではなく、明らかに目覚めた状態でこの地上に立つのである（無意識・眠り・死の状態とは決して同じではない。意識がなくなってしまうては、それは人間にとって救いではないからだ）。人間にとっての救いであるからには、意識はより明瞭に冴え、しかも脅威に晒されていた自身の過去も鮮明に記憶している（もし過去の記憶がなければ、救われた自分の自覚をも失っていることになるから、それは救いとはならない）。しかも、もしこのような人がいるとすれば、その人にはもう自他の区別はない。そんな必要がないのである。なぜなら、全てが最早脅威ではなくなっているからだ。人間に魂（意識・無意識・肉体の全てを含む）の救いがあるとしたら、これ以外には考えられない。いや、そう考えるのでなければ、意識という閉塞宇宙には最早救いはない。というより、むしろ、そうとしか考えられないというところに現実があるということなのである。

しかし、〈あらゆる脅威を苦もなく受容できる〉などということが果して本当に人間に出来るものであろうか。一体現実になどのようにすれば、無理なく全てを赦せるような自分を引き出せるのだらう、一体どうしたら意識にとって真に救いとなるのであろう——それを考えると、やはり絶望のうちに気が遠くになってしまうのである。そんな心境^{ところ}に立つ故に、この現実から顔を背けて自分の立場を紛らせるためにあらゆる努力が為されてきたが、この地上の営みはあたかも全てその自己欺瞞のためにこそ費やされてきたかのように見える。だがこの作品に現れる詩人は、そのようなところに立ちながらも、どうしても容認できな

いことを無理にしようとはしなかった。自分の実感に卒直であった。だから、天と、そして自分の魂と、和解することなく乖離したままになるのだが、このところこそ詩人の最も詩人らしい存在価値が現れているのである。

現実^{じぶん}に敏感な人間が、人間の本質である意識、それも受身の意識の側に立ち、その救いのために求道するのであるが、悲しいかな、詩人は意識の上で求道的ではあっても、現実には神秘体験者ではなかった（体験があれば作品に現れるところももっと違ったものとなっていたかもしれないが）。それ故に、詩人は、『マンフレッド』に現れる詩人は、絶望の異邦人と化したまま宇宙を永遠に遍歴する無軌道の彗星となるのである。そしてその軌跡が＜意識の疼き＞となって現れるのであるが、未だ容易に天地と和解し得ぬ魂の代弁者となって、真の救いを求めて足掻く、そんな詩人の、あくまでも意識^{にんげん}の側に立ち人間として堪える実直さは評価されて然るべきであろう。そのような＜意識の疼き＞を表白する詩人がその境地から＜魂の救い＞を望むとすると、それはやはり、この宇宙次元を超えたところにしかない。この宇宙を超えた＜別宇宙＞という視点は、後の作品『カイン』に現れることになるのである。

注

- (1) Peter Quennell (ed.), *Byron : A Self-Portrait* (2 vols ; John Murray, 1967), II, 662. 詩人自身が「精神の劇場」と名づけた詩劇には, *Manfred* (1817), *Marino Faliero* (1820), *Sardanapalus* (Jan.-May, 1821), *The Two Foscari* (June-July, 1821), *Cain* (July-Sep., 1821), *Heaven and Earth* (Oct., 1821), *Werner* (Dec., 1821-Jan., 1822), *The Deformed Transformed* (May-June, 1822) がある。
- (2) Rowland E. Prothero (ed.), *Letters and Journals : The Works of Lord Byron* (13 vols ; New York : Octagon Books, Inc., 1966), V, 360-61.
- (3) Thomas Moore, *The Works of Lord Byron : with His Letters and Journals, and His Life* (17 vols ; London : John Murray, 1836), XIV, p.51 (*Cain*, II, i, 113) : Let me die, as atoms die.
- (4) Thomas Moore, *The Works of Lord Byron : with His Letters and Journals, and His life* (17 vols ; London : John Murray, 1836), XI, p. 21 (*Manfred*, I, ii, 55-56) : born and dying/With the blest tone which made me!
- (5) Moore, *op. cit.*, XIV, p. 50 (*Cain*, II, i, 75-77) : But at least/Let what is mortal of me perish, that/I may be in the rest as angels are.
- (6) Moore, *op. cit.*, XI, p.14 (*Manfred*, I, i, 136) : Forgetfulness ; p.14 (I, i, 144) : oblivion, self-oblivion.
- (7) *Ibid.*, p.26(II, i, 24-30) : I say 'tis blood—my blood! the pure warm stream/Which ran in the veins of my fathers, and in ours/When we were in our youth, and had one heart,/And loved each other as we should not love,/And this was shed : but still it rises up,/Colouring the clouds, that shut me out from heaven,/Where thou art not—and I shall never be. ; p.35 (II, ii, 118-21) : Not with my hand, but heart—which broke her heart—/It gazed on mine, and wither'd. I have shed/Blood, but not hers—and yet her blood was shed—/I saw—and could not stanch it. ; p. 47 (II, iv, 121-24) : Thou lovedst me/Too much, as I loved thee .

we were not made/To torture thus each other, though it were/The deadliest sin to love as we have loved.

- (8) *Ibid.*, p.34(II, ii, 105-17) : Man. She was like me in lineaments—her eyes,/Her hair, her features, all, to the very tone/Even of her voice, they said were like to mine ;/But soften'd all, and temper'd into beauty ;/She had the same lone thoughts and wanderings,/The quest of hidden knowledge, and a mind/To comprehend the universe : nor these/Alone, but with them gentler powers than mine,/Pity, and smiles, and tears—which I had not ;/And tenderness—but that I had for her ;/Humility—and that I never had./Her faults were mine—her virtues were her own—/I loved her, and destroy'd her!
- (9) *Ibid.*, p.34 (II,ii,124) : The deadliest sin to love as we have loved. ; p.26 (II, i, 29-30) : that shut me out from heaven,/Where thou art not—and I shall never be.
- (10) *Ibid.*, p.11(I, i, 46-48) : A wandering hell in the eternal space ;/By the strog curse which is upon my soul,/The thought which is within me and around me. ; p.19 (I, i, 250-51) : I call upon thee! and compel/Thyself to be thy proper Hell! ; p.54 (III, i, 73) : Would make a hell of heaven.
- (11) *Ibid.*, p.36(II, ii, 147-49) : my sciences,/My long pursued and super-human art,/Is mortal here.
- (12) *Ibid.*, p.10 (I, i, 21-27) : Good, or evil, life,/Powers, passions, all I see in other beings,/Have been to me as rain unto the sands,/Since that all-nameless hour. I have no dread,/And feel the curse to have no natural fear,/Nor fluttering throb, that beats with hopes or wishes,/Or lurking love of something on the earth. ; p.32 (II, ii, 50-57) : My spirit walk'd not with the souls of men,/Nor look'd upon the earth with human eyes ; The thirst of their ambition was not mine,/The aim of their existence was not mine ;/My joys, my griefs, my passions, and my powers,/Made me a stranger ; thou I wore the form,/I had no sympathy with breathing flesh.
- (13) *Ibid.*, p.21 (I, ii, 39-45) : But we, who name ourselves its sovereigns, we,/Half dust, half deity, alike unfit/To sink or soar, with our mix'd essence make/A conflict of its elements, and breathe/The breath of degradation and of pride, Contending with low wants and lofty will,/Till, our mortality predominates.
- (14) *Ibid.*, p.33 (II, ii, 76-79) : For if the beings, of whom I was one, —/Hating to be so, — cross'd me in my path,/I felt myself degraded back to them,/And was all clay again.
- (15) *Ibid.*, p.32 (II, ii, 63) : My joy was in the wilderness.
- (16) *Ibid.*, p.33 (II, ii, 89-90) : I made/Mine eyes familiar with Eternity.
- (17) *Ibid.*, p.56 (III, i, 123) : The lion is alone, and so am I.
- (18) *Ibid.*, p.57 (III, i, 125) : Because my nature was averse from life.
- (19) *Ibid.*, p.57 (III, i, 126-34) : for I would not make,/But find a desolation : —like the wind,/The red-hot breath of the most lone Simoon,/Which dwells but in the desert, and sweeps o'er/The barren sands which bear no shrubs to blast,/And revels o'er their wild and arid waves,/And seeketh not, so that it is not sought,/But being met is deadly ; such hath been/The course of my existence.
- (20) *Ibid.*, p.56 (III, i, 116) : I could not tame my nature down ;
- (21) *Ibid.*, p.44 (II, iv, 61-63) : That knowledge is not happiness, and science/But an exchange of ignorance for that/Which is another kind of ignorance. ; p.9 (I, i, 8-12) : But grief should be the instructor of the wise ;/Sorrow is knowledge : they who know the most/Must

- mourn the deepest o'er the fatal truth,/The Tree of Knowledge is not that of Life.
- (22) *Ibid.*, p.44 (II, iv, 47) : The overruling Infinite—the Maker.
- (23) *Ibid.*, p.36 (II, ii, 149-50) : I dwell in my despair—/And live— and live for ever. ; p.54 (III, i, 70) : The innate tortures of that deep despair.
- (24) *Ibid.*, p.55 (III, i, 79-85) : For this will pass away, and be succeeded/By an auspicious hope which shall look up/with calm assurance to that blessed place,/Which all who seek may win, whatever be/Their earthly errors, so they be atoned :/And the commencement of atonement is/The sense of its necessity. ; p.52 (III, i, 43-51) : there still is time/For penitence and pity : reconcile thee/With the true church, and through the church to heaven. ; p. 56 (III, i, 99-100) : To reconcile thyself with thy own soul,/And thy own soul with heaven.
- (25) *Ibid.*, pp.54-55 (III, i, 66-78).
- (26) OED参照 ; Reconcile(8) : To bring into a state of acquiescence (+with) or submission to a thing.
- (27) Moore, *op. cit.*, XI, pp.13-14 (I, i, 116-23) : The hour arrived—and it became/A wandering mass of shapeless flame,/A pathless comet, and a curse,/The menace of the universe ; /Still rolling on with innate force,/Without a sphere, without a course,/A bright deformity on high,/The monster of the upper sky!
- (28) *Ibid.*, p. 56 (III, i, 119).
- (29) *Ibid.*, p.27 (II, i, 44-48) : I tell thee, man! I have lived many years,/Many long years, but they are nothing now/To those which I must number : ages—ages—/Space and eternity—and consciousness,/With the fierce thirst of death—and still unslaked!
- (30) *Ibid.*, p. 20 (I, ii, 23-29) : There is a power upon me which withholds,/And makes it my fatality to live ;/If it be life to wear within myself/This barrenness of spirit, and to be/My own soul's sepulchre, for I have ceased/To justify my deeds unto myself—/The last infirmity of evil. 詩人は、精神の不結実 (barrenness of spirit) という表現によって<意識の閉塞性>を表している。
- (31) *Ibid.*, p.70 (III, iv, 129-40).
- (32) *Ibid.*, p. 21 (I, ii, 52-56) : Oh, that I were/The viewless spirit of a lovely sound,/A living voice, a breathing harmony,/A bodiless enjoyment—born and dying/With the blest tone which made me! 詩人は、a breathing harmony にこそなりたい、と求道する。
- (33) Moore, *op. cit.*, XIV, p.26 (I, i, 126-27) : One who aspired to be what made thee, and/ Would not have made thee what thou art. このように言うルーシェを通じて、詩人は創造主とその創造を拒絶し、<別宇宙>を志向する。